

あかしん

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

総合印刷物企画・プランニング・デザイン・印刷・加工・
オンデマンドデジタル印刷・デジタルメディア企画制作



半田中央印刷株式会社

〒475-0032 半田市潮干町1番地の21
TEL <0569> 29-2525 (代) FAX <0569> 29-4500
E-mail: main@handa-cp.co.jp <http://www.handa-cp.co.jp>

企画・制作：株式会社 新聞ビル

元氣のでてくる“ことばたち”

(167)

村上信夫



姓もおんなじ仏さまになるんだ。コスモスになって風に揺れてるんだ」と言っていた。舞台は、一面のコスモス畑で、幕を閉じる。

人は死んだらコスモスになる

女優 有馬理恵さん

女優魂

その芝居をライフワークにしている女優がいる。主人公ふじ子を演じるのが、文学座の女優・有馬理恵さんだ。

1972年、和歌山県生まれ。父が、演劇観賞会の仕事をしていたので、幼いころから、芝居はたくさん見てきた。それが、彼女の感性を培ってくれた。小学校時代は、学芸会大好き。中学校では、演劇部にいたが発声練習がいやでやめた。

高校時代は、新体操部。5歳から18歳までクラシックバレエを習っていたが、特に演劇への興味はなかった。

それが、高校2年生の時、和歌山市民会館で舞台『釈迦内枢唄』を観劇したことが人生を変えた。前進座の浅利香津代さんが、20年間演じ続けた舞台だった。



俳画／イネ・セイミ

何かが駆け巡る思いで、改めて「差別」について考えた。この芝居には、交錯する思いをすべて引き受け、自分は何をしたのか問われているエネルギーが感じられた。

『釈迦内枢唄』を観た後、にわかに大受験を諦め、自分が感動した役者に挑戦してみたいと方向転換した。俳優座の研究生になった。

前から2列目、下手通路側。座った席も覚えている。東北の言葉もわからないのに、泣きっぱなしだった。幕が下りても動けない放心状態だった。

一週間、学校へもいけなかった。生まれ育った周辺に被差別部落があったこともあり、「差別」については、これまでも考えてきた。部屋に籠り、身体中

■村上信夫プロフィール

2001年から11年に渡り、『ラジオビタミン』や『鎌田實いのちの対話』など、NHKラジオの「声」として活躍。この4月からは、全国を回り「嬉しい言葉の種まき」をしながら、文化放送『日曜はがんばらない』(毎週日曜10:00～)、ABCラジオ『osaka歴史ロマン』(毎週月曜18:35～)、月刊『清流』連載対談～ときめきトークなど、新たな境地を開いている。

1953年、京都生まれ。元NHKエグゼクティブアナウンサー。これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。著書に『ラジオが好き!』(海竜社)『ことばのビタミン』(近代文芸社)『いのちの対話(共著)』(集英社)など。

『ミフノの奇蹟』という舞台がターニングポイントになった。与えられた役は銅像だった。舞台上で1時間立ったまま。奇跡が起きて、銅像は動くのだ。役作りをしない役作りに気づいた。

俳優になって9年で、念願の『釈迦内枢唄』のふじ子役がやってきた。だが、この役は、心の奥底を開かないと演じられない。舞台で死んでもいいというぐらいの覚悟がいる。まさに必死の思いで食らいついた。ひとたび、舞台にたつと、釈迦内のふじ子の形相に入れ替わる。

この役を演じるに当たって、原作者の水上勉さんに、一度会いたくて、自宅に電話をかけたが、不機嫌な応答だった。そこで毎日手紙を書き続けたが、「字が小さすぎて読めないから、パソコンのメールにしてくれ」と言われた。しかもパソコンの機種まで指定された。仕方なく30万円借金して購入し、パソコンも一から勉強した。

それでようやく「一度おいで」と声をかけられた。長野県の北御牧村の自宅に伺い、料理とビールを御馳走になった。その後、水上勉さんから届いた手紙には、「作者が書かぬことを知る役者を得たことを喜びます。舞台の終幕にはコスモスが見えました」とあった。

母の背中

この芝居を演じる上で、行動を起こそうとしたことが、思わぬ人生の展開を呼ぶ。

戦争を知らない自分がこの芝居をやっているのかという疑問から、イラクに行つてボランティア活動をしように思った。高遠菜穂子さんのボランティア活動を実際に見てみたいと思った。イラクに出発する予定の5日前にあの事件が起きた。2004年のイラク人質事件。

今度は、救援活動に参加するなかで、カメラマンの郡山総一郎さんと知り合った。郡山さんの撮影した貧困と紛争の中に生きる子どもたちの写真を見て、子どもたちの瞳がふじ子に重なった。

そして、ご本人曰く、成り行きで結婚。2005年には長男、陸くん誕生。出産1ヶ月後からは、舞台に復帰した。泣きすぎる我が子を置いて、母親として後ろ髪を引かれぬわけがない。「それでも舞台に立つのか」と毎回、自問自答する。「ふじ子の役なら、陸は許してくれるに違いない」と自分を鼓舞しながら舞台に立つ。陸くんには「母の背中をみて育つてほしい」と思っている。

ラジオが好き!

村上信夫

好評発売中

■イネ・セイミプロフィール



フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに少女猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

俳画教室開講中

ところ 常滑屋
とき 月二回 第二・第四金曜日
午後一時～三時
会費 一回 二、二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九三三〇四七〇

インディアンフルート教室開講しました。誰でも気軽に吹けます。入会受付中!!

何か始めたいと思ってる貴女。数年後、素敵にフルートを奏でる姿がそこにあります。楽しく個人レッスン致します。

講師 イネ・セイミ
(フルート奏者 指導歴30年)
1レッスン・1時間5,000円(ティータイム付)
0569-89-7127
申込み お問合せ seimine@oasis.ocn.ne.jp

慈愛の人・良寛(87)

杉本武之

良寛と宮沢賢治(その8)

◎賢治をめぐる女性たち(3)
母のイチ、初恋の看護婦
妹のトシ、相思相愛の大鳥ヤスについて書いてきました。
今回も、賢治の生涯における重要な女性たちを探求していきます。

⑤高瀬露

30歳の宮沢賢治は、大正15年3月31日、4年4カ月勤めた花巻農学校を依頼退職します。そして、4月1日、実家を出て、下根小桜の別宅に移り、農民としての独居自炊の生活に入ります。花壇を作ったり、開墾したり、青年たちを集めてレコード鑑賞会を開いたり、合奏練習をしたりしていましたが、6月には農民芸術概論を書き、8月には羅須地人協会を設立して本格的な活動に取りました。協会での活動だけでなく、町内や近郊の農村で、無料の農事講演や肥料設計なども熱心に行い始めました。

翌年の8月頃から、協会の近くに住む女性で、小学校の教員をしていた高瀬露が、しばしば賢治を訪れるようになりました。賢治の生涯における問題の女性です。

高瀬露は明治34年(1901)に生まれました。賢治より5歳年下。花巻高等女学校卒業後、准教員の資格を取り、教職に就いていましたが、大正12年に正教員となり、稗貫郡湯口村宝閑小学校に勤務するようになりました。そして、26歳の時に賢治の羅須地人協会に姿を現すようになったのです。初めのうちは、賢治もこの女性に好感を持ち、来訪を歓迎していました。しかし、やがて彼女の積極的な行動に辟易するようになります。

賢治の友人の森荘巳池は、この女性のことをこう書いています。

「賢治も初めのうちは、そこらが片付いたり、計画して



羅須地人協会の教室

いる芝居に出演してもらうことを考えて、すっかりした人だと協会員にも語って喜んでいましたが、彼女の好意に溢れた贈り物は、だんだん彼を恐縮させ息づまらせた。一方、彼女の思慕と恋情は火の

の小学校の近くに家を借りて家財道具を整え、彼を待った」

昭和6年10月4日、晩年の賢治は『雨ニモマケズ手帳』に、次のような文語詩を書きました。

道なれや」
高瀬露という女性が、聖女を装って自分に近づいて来た。目論みがすべて不調に終わったので、いま私の像に釘を打ち、後足で泥をかけている。しかし、振り返って見ると、自分がしてきたことは公明正大なただ一筋の道であつたのだろうか。必ずしもそうではなかった。私にもやましいところがあつた。賢治は自分の取つた言動を反省しているのです。

賢治の愛を真剣に求めて過激な行動を取り、賢治ファンから時には「悪女」呼ばわりされている高瀬露は、どんな先生だったのでしょうか。教え子の一人はこう語っています。

「五六年生の時、裁縫と唱歌を教わった。やさしい物静かな先生で、いつもきれいな着物を着ていた。おながが大きく、授業中にいねむりをしていたこともあつた」

賢治の愛を真剣に求めて過激な行動を取り、賢治ファンから時には「悪女」呼ばわりされている高瀬露は、どんな先生だったのでしょうか。教え子の一人はこう語っています。

賢治は、伊豆大島に行きました。その島に暮らしていた伊藤七雄を訪問するためでした。岩手県の水沢で生まれた伊藤は、賢治より2歳年下で、ドイツ留学中に結核を病み、伊豆大島に土地を買い、家を建てて、妹のチエに看護してもらいながら療養していました。その年の春、病状がいくらか軽くなり、島に農芸学校を開設したいと思い立ち、妹を伴って賢治を訪問して



Y・R男(6班)

別の教え子は、こう回想しています。「色の白い、きれいな先生で、語れば朗らかな人だけれど、泣きたいような顔をする時もあった。なんとなく悲しいことがあつたようだった。後で考えると、昭和8年に宮沢賢治が亡くなった、その頃だったんですね」

良寛にも晩年、貞心尼という若くて積極的な女性が近づいてきました。良寛はその一途な愛を受け入れませんでした。二人はこの世に無いような純真の愛を交わしました。もし賢治に高瀬露の愛を受け入れるだけの寛大な心があつたら良かったのに、と私は思っています。

昭和3年6月12日、32歳の賢治は、伊豆大島に行きました。その島に暮らしていた伊藤七雄を訪問するためでした。岩手県の水沢で生まれた伊藤は、賢治より2歳年下で、ドイツ留学中に結核を病み、伊豆大島に土地を買い、家を建てて、妹のチエに看護してもらいながら療養していました。その年の春、病状がいくらか軽くなり、島に農芸学校を開設したいと思い立ち、妹を伴って賢治を訪問して

この指とまれ(198)

氏原朝信

「班別新聞」と学級通信・文集「スクラム」(4)

六年生といえば、修学旅行です。その修学旅行にまつわる記事や卒業記念号で書いている文章を抜粋したものを載せ、この号は、「修学旅行特集」にします。

4班(5月19日No.4)

修学旅行

5月29・30日に、修学旅行に行くことになりました。みんなが楽しそうに待っています。

早く行きたいな。

6班(6月7日5号)

修学旅行

東大寺を見学した時に、にわか雨が降ったので、真言院で雨宿りをしました。雨がやんだので大仏殿を見学しました。五組や一組などは「にかく(仁鶴)」に

たから残念だった。

H・H男(1班)

▽[略禁止されていたまくら投げを一組の女子として顔に当てられました。M先生に叱られました。

(略) はじめて見た鹿はと

てもかわいかったです。東大寺に入る前に雨が降ってきた。雨宿りをせずに走っていたけば、二角(仁鶴)に会えたのに。やらしい氏め

と思ったこともありましたが、法隆寺の俳句で「柿食えば鐘がなるなり 法隆寺」を「いも食えば 鐘がなるなり 法隆寺」と独り言を言っ

てふざけていました。

M・T女(2班)

▽[略] 東大寺の大仏が大きかった。途中でパラパラと雨が降ってきて、雨宿りを

をした。

旅館の中では、まくら投げやいをやったりしました。そして、夜中に〇が寝言をい

いました。

I・I男(3班)

▽[略] まず、猿沢の池に行きました。たくさん亀がいました。それから東大寺へ行き、大仏を見て、大仏の鼻の穴と同じ大きさの穴をくぐってき

ました。そこをくぐると長生きできるということでした。

旅館にいて風呂に入りま

くら投げをしてとても楽し

かったです。

次の日朝早く、若草山を見ていたら、鹿がいました。帰り、おみやげにペンナントと八ツ橋を買いました。

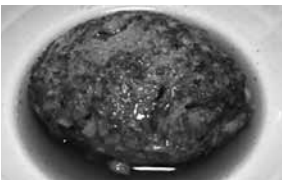
Y・R男(6班)

長澤晶子のSPEED★COOKING!

夏の疲れと体調も整えましょう お野菜たっぷり和風ハンバーグ

材料

- 【4人分】
- 食パン……1枚(小さくちぎっておく)
 - 合びき肉…600g
 - 玉ねぎ……1個(みじん切り)
 - にんじん…1/2本(みじん切り)
 - しいたけ…2個(みじん切り)
 - ↑「しめじ」「えりんぎ」などお好みのきのこで可
 - ひじき……少々(もどして水気を切りみじん切りにして)
 - 卵……………2個
 - しお、こしょう…適量
- ② 油……………適量
- ③ 水……………1カップ
- ④ 和風だしのもと…小さじ2
- ⑤ しょうゆ…大さじ2
- ⑥ みりん……大さじ2
- ⑦ 酒……………大さじ1
- ⑧ 砂……………大さじ1



作り方

- ①ボウルに①を入れよく混ぜ、4等分にし形を丸く整える。★
- ②フライパンを熱し②を入れ、★を入れ、両面きつね色にし中まで火が通るように焼く。
- ③別鍋に③を入れ煮立て、④に加え入れ、味をふくませる。
- ④器に盛りつける。

常滑市文化会館

- ◎常滑市文化会館
- ▼バレエ発表会(一日)開場午後一時 開演 同 時半(同三時半) 入場無料 問合せ 伊藤祐子 ☎43-6469
- ▼常滑高等学校陸祭(五日)水第一回 開場 午前九時十五分 開演 同九時半(正午) 第二回 開場 午後〇時半 開演 同一時半(同四時) 入場 保護者卒業生等 問合せ 愛知県立常滑高等学校 ☎43-1151(田中)
- ▼常滑おやこ劇場 低合同例会「太鼓で遊ぶどんカカ」九日(日)開場 午後五時三十分 開演 同六時(同七時十分) 入場無料 問合せ 常滑おやこ劇場 ☎34-7207(竹内)
- ▼常滑市小中学校音楽会(十三日)開場 午後〇時半 開演 同一時半(同三時半) 入場無料 問合せ 常滑市立西小学校 ☎35-2104(鶴部)
- ▼常滑青年会議所創立50周年記念事業(十五日)開場 午後一時 開演 同(同四時) 入場

常滑市体育館

- ◎常滑市体育館
- ▼東海卓球選手権大会予選(中学校・八日)開場 午後一時 開演 同 時半(同三時半) 入場無料 問合せ 松岡裕子 ☎42-2624(関)
- ▼平田惣一奉寿記念コンサート(二十三日)開場 午後一時 開演 同一時半(同三時半) 入場無料 問合せ 平田惣一奉寿記念コンサートバンド ☎43-5244(関)
- ▼常滑市・名古屋芸術大学連携事業(オーストラリア・ボレーショ)コンサート(二十九日)開場 午後五時半 開演 同六時 入場無料 問合せ 常滑市生涯学習スポーツ課 ☎43-5111
- ◎常滑市立図書館
- ▼鬼崎木版教室作品展(十二日)開場 午後〇時半 開演 同一時半(同三時半) 入場無料 問合せ 常滑市立西小学校 ☎35-2104(鶴部)
- ▼中日写真協会常滑支部展(二十五日)開場 午後一時 開演 同(同四時) 入場

(5ページへ続く)



(有)大阪屋葬祭

常滑ホール 鬼崎ホール 阿久比ホール

TEL<0569>35-4949(代表)
FAX 35-4911



知多の新鮮たまご
発酵ケイフン

(有)知多エッグ

知多郡武豊二ツ峯380
TEL0569-73-6341

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

— 自分ドラマつくろう — (17) 岡田 清治

結婚

「混んでくると、注文がしにくくなりますので、いつぱんに注文をした方がいいですよ」

「はい」

店に入って一〇分もたたないのに、カウンター席もテーブル席もほとんど埋め尽くされた。一回転しないと店には入れない。居酒屋の客は概して長居するから午後の八時前後なら多少、空くのではないかと思われた。

「筑波山は低い山ですが登りは結構、きつかったですね」

「そうですね」

「坂上さんはこれまで登山はよくされたのですか」

「はい、大学時代、山の同好会のようなところに入って、あちこちの山に登りました。でも、社会人になってからはほとんど登っていません」

「私はそれほど登っていませんのですが、北アルプスの立山から乗師岳まで縦走したことがあります」

「すごいですね」

「途中で豪雨と雷に出くわしました。引率者が金属のモノを外せと言いましたから、時計など放り投げた思い出があります」

「山での落雷は怖いですね」

「大きな木に落雷しましたが、木が真つ二つに割れ、そこから煙が上っていました」

「すごい力ですね」

「やはり自然をおろそかにできないと思いました」

二人は山登りの話をしながら楽しい時間を過ごした。ただ、坂上はかつて谷川岳の事故で恋人を失ったことは心の中に封印したままだった。このことを結婚後、告白されるのだが、この時点では知らない。

前島自身は心中で「思い切って坂上のマانشョンへ行きたい」ことを、どのタイミングで伝えようかと思案していた。

一時間余りで店を出た。

「コーヒーでも飲みませんか」

「私のマانشョンが近いですから、お寄りになりますか」

「はい」

「むさ苦しいところですよ」

二人は明治座に向かって歩き出した。

かつての店で、善真三とママは何も言わずに黙って前島の話聞いていた。

「こんな話、面白いですか」

「どつてもいいわ」

ママはもつと先へ進めてほしいと促した。

「前島さんは人生の荒波を乗り越えてこられたから含蓄のあるお話ができるのですね。実に興味深いです。私もこの先について聞きたいです」

二人はそれぞれ猪口とグラスを口に運んだ。ママが焼酎のお湯割りを善に、日本酒を前島に注いだ。

「前島さん、マانشョンでお二人は愛を誓い合ったの？」

「まあ、そういうことです。お酒も入っていましたから衝動的だったと思います。それに何といつても若かったからです」

「女性から住まいへ誘われたら、男なら一〇〇%関係ができると思いますよ」

「そうなの。真三さんはかつて誘われたが、断ったとおっしゃっていましたよ」

「それは時と、相手によりますよ」

「女性から誘われると警戒するの？」

「素面では難しいね」

「それで前島さんはその後、坂上さんと結婚したのね」

「そうですね。翌年、名古屋城が見えるホテルで少人数で式を挙げました」

「そうですね。両家とも賛同されたのですか」

「とくに、反対はありませんでした。要はすべて坂上さんのペースで進めました」



プンタアレナスの朝(チリ)

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。今回は「就職」「日本のゆくえ」「結婚」「夫婦」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。

FAX：0569-34-7971

メール：takamitsu@akat-shinbun.net



■プロフィール

著者：岡田清治(おかだせいじ)

一九四二年生まれ ジャーナリスト

(編集プロダクション・NET108

代表) 著書に『心の遺言』

『あなたは社員の全能力を引き出せますか!』

『リヨンで見た虹』など多数

「前島さんのお姉さんはどうでした」

「『保、おめでと』と言って、式に出て写真を撮ってくれました」

「紹介者の山根夫妻は、いかがでしたか」

「二人とも祝福してくれました」

「では、順風な船出だったのですか」

「見かけはそうでしたが、やがて会社と結婚人生が狂い出ししました」

「だから独立され、バツイチとも話されたのですか」

「その核心部分を聞かせてほしいわ」

「もう、何も隠すことはありません」

ママと善は前島の次の言葉を待った。

「それでは人生の懺悔を込めて話しますか」

前島は再び、続きの話を始めた。

結婚式の後、二人は山根夫妻とホテルのバーで飲んだ。

「ご紹介してから結婚まで早かったですね」

「そうですね。半年ほどですから…」

「でも、雰囲気の良い式でしたよ」

「ありがとうございます。これも幸子さんのおかげよ」

「とんでもない。お二人が似合いだったからよ。私たちの力は微々たるものよ」

「山根さんと出会わなかったら、今回の結婚式はなかったのですから、お二人は我々にとって神様のような存在です」

「オーバーですよ。むしろ結婚までより、これから以後の方が大事なように思いますね」

「お住まいは品川にされたそうですね」

「そうですね。ちょうど、二人の職場の中間で便利だと考えました」

「なるほど…」

「ところで、新婚旅行はどこへ」

「明日から四日間、九州へ行くと思っています」

「いいですね。九州はどちらですか」

「別府温泉から阿蘇、熊本を計画しています」

「別府は人気スポットですね」

「初めてですか」

「二人とも初めてです。別府の亀の井ホテルに泊まります」

「そうですね。亀の井ホテルは名門ですね」

「亀の井ホテルについていろいろ調べて、興味が覚えたのです」

「さすがに、前島さんですね。マーケティングですか」

「そういうことではないのですが、好奇心ですかね」

前島は亀の井ホテルについて話し始めた。

「亀の井ホテルは明治四十四年(一九一)一、油屋熊八という男が創業したのが始まりです。

この油屋熊八という人物が実にユニークなんです。豪放磊落で

しかもアイディアマンです。彼は宇和島の米屋の倅でしたが父

親の死後、店をたんで女房と大阪の北浜で株を始めたのです。

一時は油屋將軍と言われるほど、儲けたのですが、その後露戦

争の反動で大損失を出し夜逃げ同然で東京に移ってしばらくして北浜に舞い戻りました。

再び株に手を出したのですが、すっかりかんになって单身アメリ

カに渡りました。女房は知合いのいる別府に行かれたのです。

彼はアメリカに約三年滞在して帰国、女房のいる別府に行きま

した。そして四十九歳で旅館を始めるのですが、別府温泉はすで

に名のある温泉でしたから、よそ者が旅館を経営するのはそう容

易なことではなかったのです。

そこで彼は既存の旅館とは違ったやり方をとったのです。彼は

アメリカでホテルを見聞していましたから西洋式の旅館に改装

して水洗トイレを初めて導入しました。それによって外国のお客

を呼び込んで、できるだけ競合を避けることをしたのです。

自分の旅館のことでなく、当時は別府に客船が着くと接岸

できなかったので单身、大阪の船会社に乗り込んで棧橋建設を談

判、実現して地元に変容、喜ばれたのです。そのほか、別府温泉を

日本一にするためのPR作戦は奇想天外のことをやっています。

別府温泉といえば、地獄巡りが有名ですが彼は乗合バスを導

入して振興を図りました。

敗戦で別府の主要ホテルは進駐軍の宿舎として収容されまし

た。その後、元の所有者に戻りましたが、油屋熊八の死後、時代の

流れと共に衰退していききました。

現在、亀の井ホテルの名前を継ぎながら形態を変えて全国展開

しています。そして創業者油屋熊八の「おもてなしの心は大事に

守っているのです。

「そうですね。紆余曲折があったのですか」

新婚旅行から帰って、二人はこれまで通りの生活を始めた。共

働きたから家事もそれぞれできる者がやろうと暗黙の了解のよ

うな形で日々を送っていた。坂上は出張、それも海外へ出かける

ことも多く、前島は一人で休日を過ごすこともあった。

結婚して数ヶ月後、山根から出張で上京する電話が入った。

「久しぶりだね。今日は恵美は出張で外泊だからちようどいい」

二人は会社の玄関で落ち合って、割烹店みみずくに向かった。

「新婚旅行から帰って、お二人は幸せな生活を送られたのではないのですか」

「初めは忙しいので気にもしなかったのですが、どうも夫婦生活

がうまくいかないといいますが、恵美はセックスを嫌がるよう

に思えました」

「拒否するのですか」

「初めは受け入れましたが、燃えるという感覚はなく、しらっと

しているのです」

「疲れていたのではないですか」

「坂上も仕事を続けていますから疲れていたとは思いますが」

「そら商社の第一戦で活躍されているのだから疲れていますよ」

「私も日常はゴルフ接待や飲み会もあって、その気になれないこ

とはあります」

「私なんか、子どもができてからは、幸子も自分からほとんど求

めてこなくなりました」

「山根さんと違って、うちは新婚はやばやですよ」

「それはそうですね」

「夫婦生活はあっても、なにか義務的に受け入れている感じで、

私の方が途中から意欲をなくすのです」

「それは困りましたね」

「どうもこの最中に何かほかのことを考えている様子なのでは

す」

「やはり結婚は夫婦生活が大事ですから、話し合うしかないで

しょうね」

二人は割烹店を早目に切り上げて山根は川崎市街のクラブに

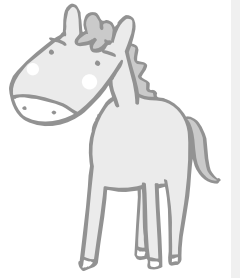
前島を誘った。

(続く)



人形劇と子供たち

富永史江



プロフィール ● 富永 史江(とみなが ふみえ) 1967年生まれ 45歳・名古屋市出身 西尾市吉良町在住・主婦・2009年より一色おはなし会で活動

きっかけ

「わらしべ いっぱん♪ わらしべ いっぱん♪ 長者になつた〜♪」
保育園児達が、楽しそうに歌いながら遊戯室を出ていく。
その後ろ姿を見送り、自分も嬉しくなる。

「よかったら、メンバー募集中よ。」
「えっ そうですか？」

3年前、3才の息子を連れて人形劇を見に行った時の事だ。

劇が終わり、子供と一緒に片づけを見物していたら、話しかけられた。

メンバー募集中と聞き、なんだかとても楽しそうな予感として、会に入れてもらうことにした。

公演日

活動日は、基本的に木曜日。公演日の朝は、大忙し。急いで家事を済ませ、息子を送り、約束の保育園、幼稚園に車を走らせる。
到着すると、舞台道具の搬入の開始だ。

「おっと これはあつちだね。」
「それは、ここじゃなくて、向こうだよ。」

どの支柱と、どの鉄板が対なのか、置き場所は、後ろか前か、どの黒幕が右か左か、入った当初は、文字通り右往左往しながら組み立てていった。

「えっとー今日の司会は誰だっけ？」

舞台を作りながら、打ち合わせもし、世間話もし、とにかく、手も足も口もフル回転。
そうこうするうち舞台が完成。開演時間になる頃には、可愛らしいお客様たちが保育士さんに連れられ入場してくる。

始めの挨拶

「みなさん おはようございます。一色おはなし会です。」

「おはようございます。」
子供達から大音量の挨拶が返ってくる。もうそれは迫力で、自分の体が吹っ飛んでしまいそうだった。
子供達がキチンと座っているのを見て私は思わず言う。
「皆さん お行儀がいいので、びっくりしました。」
すると、さらにピーンと背筋を伸ばして、とても誇らしげな表情を見せる。



わらべ歌

「では、みなさんと一緒に、わらべ歌をします。」
「お皿に、団子に 箸持ってください。」

「じゃんけんぽん。」

お皿は、じゃんけんのパー。団子は、グー。箸は、チョキ。

子供達は、じゃんけんで勝つと、「かったー! かったー!」と、大はしゃぎ。沢山の小さな

手が舞台の方に向かって伸びている。

はじまり はじまり

拍子木の音

「チョン チョン チョン チョン チョン」
「むかし むかし あるところに 貧乏だけれど、とても心の やさしい太郎という若者がいました。」

音楽と共にお話が始まると、子供達が舞台の方に向かって伸びて



子供達は、舞台の方へのり出すようにしてまっすぐな視線をなげかけてくる。

今日の演目は、「わらしべ長者」

これは昔話だが、私達の人形劇では、原作にないタヌキとウサギが出てくる。このタヌキ、のんびり道草をしていると、ウサギに叱られ、

「まつて。ポンポコ ポンポコ」と、急いで舞台を走り抜ける。

この場面は、どこの保育園、幼稚園に行っても、子供達が大喜びする。

アブ

主人公の太郎が、わらを拾ったあと旅を続けると、アブが飛んでくる。

「ぶーん ぶーん」

と言いながら出ていくと、子供達は必ず、

「ハチだ! ハチだ!」

と言う。仕方なく、

「アブ アブ アブ」

と言うのだが、子供達は、「ハチだよ」と言い続ける。

「ハチじゃない…アブ…」

失敗

このアブ、細い棒を胴に刺し接着剤で付けてある。この棒を振りながら飛ばすのだが、ある公演中、ぐるぐる回しすぎて、アブだけが、ピューッと、子供達の方へ勢いよく飛んでいってしまった。

(しまった!)

棒を手に立ちすくむ私に、園児がアブを拾って、持ってきてくれた。急いで棒に差し込み、何事もなかったように劇を続けた。子供達も意外に騒がず、劇に戻ってくれた。

ミカンを食べる

アブを手にした主人公太郎は、子供にアブを譲り、お礼にミカンをもらうが、その後喉が渇いた娘さんにミカンを譲る。

娘さんが、ミカンを口にあてて食べると、園児の一人が、大声で

「皮をむかずに食べているよー!」

この演技に対する遠慮のない反応を聞き、次回からセリフや演技を変えることがよくある。この場面、たしかに皮をむかず食べるのは変ということで、後姿でムシャムシャすることになった。

お嫁さん

物は、ミカン、反物、馬と次々に交換され、主人公太郎はついに、畑、田んぼ、屋敷を手に入れ、長者になる。ここでめでたし、めでたし と終わらせないのが、一色おはなし会だ。

太郎は、お嫁さんを連れ再登場する。

このお嫁さん、実は途中で会った娘さん。出会った時にお互い好意を持ち、太郎が捜してお嫁さんになってもらったという想定。

このお嫁さんの花嫁衣裳は、きらきらして目を引くのか、この姿を見て喜ぶ園児もいる。

おしまい

「みんな一緒に歌ってね〜」

「わらしべ いっぱん わらしべ いっぱん 長者になつた〜」

最後は、音楽に合わせて子供達と共に歌い、終わる。

人形劇が終わると、メンバーは人形を持って、舞台前に並ぶ。園長先生の挨拶や、お礼の言葉を頂いた後、子供達は、直接人形と握手したり、人形に触ったりできる。キラキラと輝く目で、人形を見て、まるで、人形が生きているかのように触って握手する。

人形に優しく接してくれる子がほとんどだけれど、年長(五歳、六歳)にもなると、人形を笑いながら叩く子もいる。保育士さんも私達も、

「優しくしてね、叩かないでね。」と言う。
幼児は、自分が育つ環境を選べない。そんな中、してあげなければならぬこと、やってあげられることは、山のようにあると思う。

ちよつとしたきっかけで始めた人形劇だが、このかわりの中で子供達の笑顔に心が洗われ、子供達の笑顔をもっと引き出せる人形劇を作れたらと思う。

